

上天草市におけるシビックプライド を基盤とした地域課題解決の実践

田中 尚人¹

¹熊本大学 熊本創生推進機構 准教授

本研究では、地域創生を念頭に、高校生から自治体職員まで多様な主体が協働して、ないものねだりではなく地域にある資源を活かして、シビックプライドを涵養しながら、自立的に地域課題解決に取り組む実践についてアクションリサーチを行った。具体的には、過疎化、少子高齢化が激しい熊本県上天草市姫戸地区、龍ヶ岳地区において、地域住民、市役所職員、さらには地元の熊本県立上天草高等学校の生徒も参加してワークショップを行い、地域創生に資する学びをまとめた。ワークショップでは、SDGsの考え方やソーシャルイノベーションについて学びながら、地域の風土に根ざした持続可能なまちづくり提案を行った。多様な主体が対話を重視した学び合いを実践することで、地域に対する愛着や誇り、自負が醸成され、持続可能な地域マネジメントに有用な学びが得られた。

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

2016年4月に二度の震度7の強震に見舞われた熊本では、それから4年後の2020年4月COVID-19感染防止のため緊急事態宣言を受け、三密を回避しステイホームを強いられる生活が続いた。7月には県南の球磨川流域を中心として、県内各地で豪雨災害が発生し、全国初のコロナ禍での複合災害として、県外のボランティア受け入れが難しいという、防災・減災分野における新たな課題に立ち向かうことになった。頻発する激甚災害や気候変動など自然環境の変化とともに、過疎化や少子高齢化など、地域社会の変容もめまぐるしい中、自立分散型国土を形成するために、必要不可欠な自治に基づいた地域創生が求められている。

本研究では、地域創生を念頭に、高校生から自治体職員まで多様な主体が協働して、ないものねだりではなく地域にある資源を活かして、シビックプライドを涵養しながら、自立的に地域課題解決に取り組む実践についてアクションリサーチを行った。具体的には、過疎化、少子高齢化が激しい熊本県上天草市姫戸地区、龍ヶ岳地区において、地域住民、市役所職員、さらには地元の熊本県立上天草高等学校の生徒も参加してワークショップを行い、地域創生に資する学びをまとめた。本研究の目的は、多様な主体の協働による持続可能な地域づくり実践知を抽出することである。

(2) 基礎的概念の整理

本研究で用いる，基礎的概念を整理した．

1) シビックプライド

本研究では，地方の課題解決のアプローチとして，近年，地方創生や地域課題解決の文脈において注目されつつある「シビックプライド」に着目した．シビックプライドは伊藤ら^{1) 2)}が「都市に対する市民としての誇り」と定義している．単に地域に対する愛着を示すだけではなく，「シビック（市民の／都市の）」には権利と義務を持って活動する主体としての市民性という意味があり，シビックプライドには「自分自身が関わって地域をよくしていこうとする，当事者意識に基づく自負心」という意味が内包されている．

これまで，シビックプライドを構成する地域愛着に関わる分野において，その形成要因に関わる知見が蓄積^{3) 4) 5)}されており，地域に関する経験や記憶が，地域愛着の醸成について重要な役割を果たすことが指摘されている⁶⁾．また，地域学習とシビックプライドに関する研究として田中ら⁷⁾の研究が挙げられる．この研究では，地域学習がシビックプライドの涵養と密接に結びついていると考察されており，シビックプライドを「市民が地域や都市に対して持つ，愛着や誇り，自負」と定義している．

②アクティブラーニング

地域に対する愛着形成を考えるにあたって，社会科教育の実践である地域学習を参照にする必要がある．中央教育審議会の「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議まとめ」⁸⁾には，「我が国は持続可能な開発のための教育（ESD）に関するユネスコ世界会議のホスト国としても，先進的な役割を果たすことが求められる」と述べられており，「持続可能な開発のための教育」とは，環境などの様々な地球規模の問題を自らの問題として捉え，課題解決につながる価値観や行動を生み出していく「社会づくり」の担い手を育む教育を指す．

その教育手法として「能動的で対話的な深い学び」というアクティブラーニングが推進されている．学習指導要領（平成29年3月31日公示）においては「主体的な学び」を「学ぶことに興味や関心を持ち，自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら，見通しを持って粘り強く取り組み，自己の学習活動を振り返って次につなげる」と定義している．また「対話的な学び」を「子供同士の協働，教職員や地域の人との対話，先哲の考え方を手掛かりに考えることを通じ，自己の考えを広げ深める」と定義し，「深い学び」については「習得・活用・探求という学びの過程の中で，各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら，知識を相互に関連付けてより深く理解したり，情報を精査して考えを形成したり，問題を見出して解決策を考えたり，思いや考えを基に想像したりすることに向かうこと」⁹⁾と定義している．

本研究の実践として，ワークショップのデザインにも，アクティブラーニングが目指す「社会づくり」の担い手育成は大切な視点であり，能動的で対話的な，深い学びを提供するプログラムを構築した．

(3) 研究の手法：アクションリサーチ^{10) 11)}

本研究では、研究者と当事者（WS参加者）の協働的実践により展開されるという点で、アクションリサーチの側面を持つ。矢守ら¹²⁾や宮本ら¹³⁾の研究では、当事者が地域の問題解決のために研究者と協働するとき、独特の複雑性が存在すると指摘している。宮本はそれを「アクションリサーチのパラドクス」と定義している。アクションリサーチのパラドクスについて、矢守の研究から黒潮町の例を援用して説明する。例えば「美術館がない」町に、美術館を外部からの支援として供給したとする。すると、町の機能は発展したかに見えるが、持続可能なまちづくりという観点からすると、一時的な解決策に過ぎない可能性がある。外部からの支援は、当事者にとっては「私たちの町には、美術館すらない田舎なのだ」という「ない」ことへの意識の維持・強化につながる可能性がある。

そこで、持続可能なまちづくりという観点から、地方都市や中山間地の集落が抱える問題を解決するためには、従来のように「ないもの」を嘆き、迷惑施設や忌避施設の誘致・受け入れと引き換えに外的な支援を呼び込み、それによって町の「ないもの」を獲得する戦略ではなく、地域コミュニティー一人一人がシビックプライドを涵養し、地域に「あるもの」に目を向け、地域資源を活かした持続可能なまちづくりのための知見を獲得していく必要がある。

(4) 研究対象：上天草市の地域創生

本研究の対象地である上天草市は、大小100余りの島からなり、総面積886km²の離島群である。その中でも上天草市は九州本土に近い位置にある。2015年の国勢調査によると、上天草市の総人口は27,006人であり、2004（平成16）年3月に旧大矢野町、松島町、姫戸町、龍ヶ岳町の4町が合併した際の人口が33,064人であった。合併からの約10年で人口も約6,000人減少し、高齢化率は37.6%と全国平均の26.6%を大きく上回っており、深刻な過疎化、少子高齢化が地域課題である。

上天草市では、2015（平成27）年12月に「上天草市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、地域創生（地方創生）に取り組んできた。本総合戦略は5ヵ年計画であったため、平成31年度で計画期間が終了することを受け、引き続き地方創生を推進するため、産学官金で構成する「上天草市まち・ひと・しごと創生総推進会議」での効果検証や意見への対応し、2019年12月に閣議決定された国の「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」の内容等を踏まえ、2020（令和2）年3月に「第2期上天草市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定した。

2. 地域課題解決ワークショップ

(1) ワークショップの概要

本ワークショップ（以下、WSと略）では、上天草市姫戸町・龍ヶ岳町において、人口減少・少子高齢化に伴う地域の課題を共有し、地域の魅力を再発見するようなきっかけをつくるとともに、地域創生に向けて参加者自身ができること、取り組みたいことを考えるWSを行った。またWSの実施により、地域に残る若者から高齢者に加え、

市外に住む出身者等も巻き込みながら，世代や地域を超えた交流の場づくりによる地域の活性化につなげることを目的とした．

(2) ワークショップの狙い「多様な主体の連携」

1) 市内連携

本WSの実施に当たっては上天草市企画政策課と，地域に密接に関係する支所との連携を重視して実施体制を構築した．本WSを契機として，市内連携の体制をより強固なものとして，市内全体におけるまちづくり事業の活性化につなげたい．

2) 大学連携・高校連携

本WSには熊本大学の大学生，大学院生もWSに参加し，地域住民とは違う客観的な気づきの機会を創出するとともに，熊本大学が有する知見の活用も視野に入れている．さらに，地元の高校である熊本県立上天草高等学校は，令和元年度から文部科学省が推進する「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の指定を受けた全国20校のうちの一つにもなっており，地元高校生が地域住民とともに地域を考える機会創出の一助とし，若年層のシビックプライドの醸成を図る．

3. 第1回ワークショップ「地域の課題と魅力の抽出」

(1) ワークショップの概要

日時：令和2年11月10日（火）16:00~17:30

場所：龍ヶ岳統括支所会議室

内容：①事業の主旨説明

②アイスブレイク「参加者の自己紹介」

③ミニ講演：「まちづくり」と言わない，まちづくり 田中尚人

④ワークショップ：「地域の課題と魅力の抽出」（姫戸・龍ヶ岳合同）

(2) ミニ講演：「まちづくり」と言わない，まちづくり

1) SDGs

SDGsは「Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）」の略称であり，2015年9月に開催された国連のサミットの中で，各国の代表者たちによって定められた国際社会共通の目標です．このサミットでは，2015年から2030年までの長期的な開発の指針として「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択されました．この文書の中核を成すのが，「持続可能な開発目標」つまり，SDGsです．

私たちの研究室では，このSDGsの17個の目標も大切ですが，どのようにこの目標を達成するのか，(i)誰一人とり残さない，(ii)横串にさし，まとめて考える，(iii)すべての人に役割がある，という取り組み方が重要である，と考えています．つまり，一人一人が「自分ごと」として探求的に，対話的に，自らが住まう地域に対してシビックプライドを携えて取り組むことが重要になるのです．

2) 復興からの学び

2016年4月、二度の震度7の地震に襲われた熊本地震にて被災し、その復興の中で、他の被災地から、たくさんの方を学ばせて頂きました。熊本地震から5ヶ月後の9月に訪れた長岡市の山古志村では、中越地震からの復興過程にある人々から「復興に終わりはない。復興に失敗はない。」という言葉学びました。

(i)「復興に終わりはない」とは、地震直後、山古志村から全村避難した地域の方々は、3年後山古志村に戻り、当初は「復興」の掛け声のもと活動に取り組んでおられましたが、今は「まちづくり」「地域づくり」の掛け声に変わり、それでも粛々と同じ活動を続けておられる、ということでした。「地域で暮らす」ことに終わりはありません。持続可能な営みには、終わりはないのです。

(ii)「復興に失敗はない」、復興のカタチは地域やまちによって様々です。他の場所ですぐまくいった方法が必ず、次の場所で同じように上手くいくとは限りません。つまり、成功も失敗もないのです。また、失敗とは誰が失敗と決めるのでしょうか？諦めない限り、いつでもやり直しは効くのです。

3) 「復興は木山中からプロジェクト」

熊本地震から三年が経った2018年、被災経験の風化が問題となる中、益城町立木山中学校において、「記憶の継承」を目的の一つとして「復興は木山中からプロジェクト」が実施されました。このプロジェクトは、木山中学校一年生が、「益城町のいまを未来に伝える」動画を作成するものでした。

「益城町、木山中のいま」を未来の木山中の生徒（まだ見ぬ後輩たち）に伝える、という目標設定、30秒ワンカット動画をグループで作成するという表現手法により、生徒たちが「自分ごと」として能動的にこの授業に参加し、グループでディレクター、カメラマン、キャストなどの役割分担を行い全員参加で一つの作品をつくり、お互いの班の作品を見合うことで、自らの振り返りに活かしている、ことが分かりました。また、2019年度に二度目の「復興は木山中からプロジェクト」において、二年生が取り組んだ60秒ワンカット、クラスで5班の作品をつなぐストーリーづくりにおいては、上記の工夫と効果に加え、現場の生徒以外の登場人物（地域住民など）や風景との関わり合いも撮影され、ふるさとの風景が作品の一部となっていることが分かりました。

4) 益城町新ふるさと総合研究所

益城町では、平成30年度に益城町総合計画の見直しを行うため、地域づくり人材の養成を目的に「益城町新ふるさと総合研究所」事業が行われました。この事業では、町役場と民間半々、男女も半々の30代、40代の世代から参加者を募り、14名のメンバーが全10回の「ふるさととは何か」を探求するWSを行いました。

日常を送ることに忙しい、30代、40代のメンバーがグループワークをともに行うことで、徐々に「まちづくり、地域づくりを自分ごと」として捉え、自分の言葉で「まちづくり」を語り始めました。第8回、第9回で行った、ふるさとのイメージづくり、ストーリーづくりでは、「自分の子どもの成長は当たり前。隣の家の子、他人の子どもの成長がうれしい町が、ふるさとだ」という意見や、「益城町は、応援する人を応援する町になって欲しい。応援し合う町」といったふるさとのイメージが言語化され、新しい働き方や組織の提案などがなされました。

5) 「まちづくり」と言わない、まちづくり

「まちづくり」と聞くと、すごい人がやっている、変わった、熱心な人たちだけがやっている、というようなイメージを持ちがちですが、私はそうは思っていません。誰もが、当たり前に行っていること、暮らしていることがまちづくり、そのものだと考えています。その中で、大切にしている考え方が、三つあり、

多様性：Diversity／包摂性：Inclusive／持続可能性：Sustainable

誰かと一緒に（世代をこえて）変化や違いを認め合い、誰もが活躍できるように、楽しく続けることが重要である、と考えています。

(3) ワークショップ：「地域の課題と魅力の抽出」

「地域の課題と魅力」を抽出するWSとして、ワールドカフェ「姫戸地区、龍ヶ岳地区の〇と×」を行った。ワールドカフェは、比較的短時間で参加者同士がお互いを知ることができるWS手法である。具体的には、一つのテーマについて席替えをしながら、1テーブル4人程度で10分間の話し合いを行っていくWSである。

10人の参加者に熊本大学の学生たちが3名加入することで、13名が3つのテーブルに別れ、「姫戸地区、龍ヶ岳地区の〇と×」について、10分×3回話し合った。話し合った内容については、応用紙に各自記録していく。さらに組替えをして、参加者との対面、応用紙との対面を声に出しながら行い、〇（地域のいい部分、魅力）、×（地域のよくない部分、課題）を共有した。

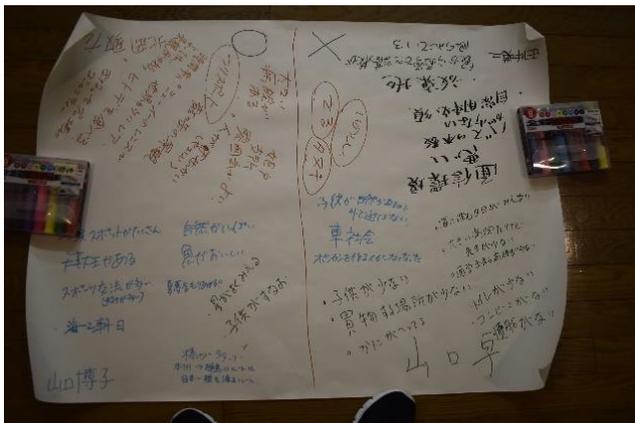


写真-1 WSの成果

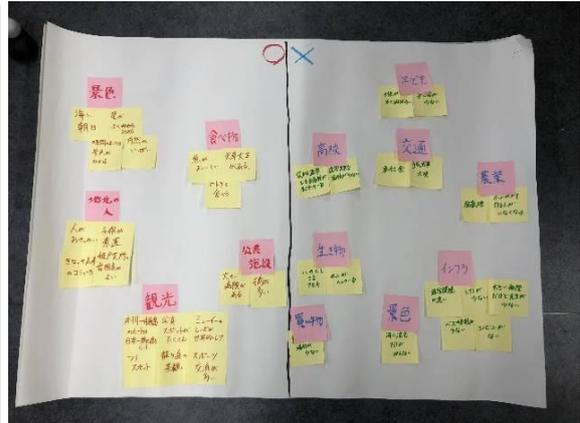


写真-2 学生らがKJ法でまとめた内容

4. 第2回ワークショップ「地域課題解決のプロトタイプづくり」

(1) ワークショップの概要

【午前：姫戸地区】

日時：令和2年12月13日（日）10:00~12:00 場所：姫戸統括支所会議室

【午後：龍ヶ岳地区】

日時：令和2年12月13日（日）14:00~16:00 場所：龍ヶ岳統括支所会議室

内容：①趣旨説明・振り返り 田中尚人（熊本大学）

②ミニ講演「まちづくりはかけ算で」 田中尚人（同上）

③ワークショップ「若者と一緒に考える地域課題解決in姫戸／龍ヶ岳」

④発表会

(2) ミニ講演：「まちづくりはかけ算で」

1) デザイン思考

『イノベーションを導く新しい考え方デザイン思考が世界を変える』¹⁴⁾を基に、まずソーシャルイノベーションについて説明しました。イノベーションは、一般的に「技術革新」である、と考えられています。このイノベーションを社会課題解決や、社会のあり方そのものに適応する考え方がソーシャルイノベーションと呼ばれています。その例として、AKB48やくまモンなどが挙げられます。

イノベーションは発明とも訳され、発明には目的があります。そして、この目的を実現するために、技術革新や発想の転換が行われ、ここで、掛け算が行われます。決して「0（ゼロ）」からは何も生まれません。

2) ソーシャルイノベーションの事例

(i) 飲み水を運びながら濾過する装置

(ii) クールビズ：身近なライフスタイルの変化が全世界のCO2削減に貢献する。

(iii) 罰すのではなく、褒めることでスピード違反を取り締まる

最後に、地域創生の先進地である島根県隠岐郡海士町において学んだ、バックキャストリングで考える「意志ある未来」の重要性を説明しました。

(3) ワークショップ「若者と一緒に考える地域課題解決in姫戸／龍ヶ岳」

第2回は、「上天草の地域資源を活かして若者と一緒に考える地域課題解決in姫戸／龍ヶ岳」というWSを実施した。前回のWSを振り返り、姫戸・龍ヶ岳地区ともに課題としてあがっていたもののなかから、「まちづくり」として解決できそうな課題を3つ選んだ。

(i) 若者の居場所がない

(ii) 働く場がない⇨お金を使う場所がない

(iii) 観光産業が上手くいっていない

この3つの地域課題を、上天草高校生や熊本大学生と一緒に、前回皆様から出して頂いた「姫戸地区、龍ヶ岳地区の○（いいところ、いいもの）＝地域資源」を活かして解決するWSを行った。

プロトタイプとして、まちづくりストーリーボードを作成し、発表してもらった。

(i) 「プロジェクト名」忘れずに！

①メンバー（テーブルの）

②プロジェクトの目的 「×」×「○」

③具体的にやることを教えて下さい。

(ii) 「10年後の地域はこうなっている」

プロジェクトが成功すると、どんな地域になっている？思い付くシーンを、具体的に3つ描いて下さい。

(iii) 「プロジェクトの魅力」

このプロジェクトの魅力、推せる点を3つ教えてください。

①ここでだけ、②今だから、③こんなことを！

(iv) 「きっかけづくり（はじめの一步）」

このプロジェクトのはじめの一步を教えてください。

誰が、誰と、何を、どこで、どのように始めますか？

5. 第3回ワークショップ

(1) ワークショップの概要

日時：令和3年2月14日（日）15:00-17:30

場所：龍ヶ岳統括支所会議室

内容：①趣旨説明・ふりかえり 田中尚人（熊本大学）

②基調講演「天草に住まうひとたちにとって魅力的な場所をつくる」

西山佳孝氏（株式会社タウンキッチン・取締役

／東シナ海の小さな島ブランド株式会社・経営戦略本部長 他）

③前回の提案に対する講評 西山佳孝氏・田中尚人

④ワークショップ「提案内容のブラッシュアップ」

(2) 基調講演：「天草に住まうひとたちにとって魅力的な場所をつくる」

1) 地方創生について

・宮本常一氏（民俗学者）「旅する巨人」

「まず、じぶんたちでじぶんたちの社会をつくってみること」

・「社会」を「地域」と置き換えてもいい。観光，地方創生につながる

2) 起業塾・創業について

・ゼミ形式，社会課題をチームで解決する。行政，民間企業とも連携

・出木杉くんタイプは「共感」を得ない

・自分の見たい未来ではなく，世の中がこうなったらいいよね，という
公明正大な未来（ビジョン）を描く >こんな事業はうまくいく

・「諦めなければ，終わりはない」 As soon as you give up, it's over.

・もはや右肩上がりはない，「終わり」にならないことが大切

3) 上天草市の提案に対して事例紹介

姫戸 よくばり体験：バルンバルンの森

姫戸の芋づる大作戦：アルベルゴ・ディフーズ

水上バイクでバズる：キューバ

姫戸のサクラダファミリア：ビルバオ

龍ヶ岳 海のyeah!：青島ビーチパーク

放課後カフェプロジェクト：アブサロンキルケ

つながりプロジェクト：アブサロンキルケ

起業の街・龍ヶ岳町：ソンミサンマウル

【まとめ】

- ・「わがまち上天草には何もない」とあきらめていないか
- ・「ないものねだり」ではなく「魅力」と、あるものに目を向けること
- ・ありたい未来はじぶんたちで妄想する
- ・上天草に住んでいる人が、つくりたいものをつくる「共感を得る未来」

6. おわりに

地域創生を念頭に置いて、多様な世代が協働する地域課題解決WSを行った結果、姫戸・龍ヶ岳両地区に4つずつのまちづくり提案をつくることができた。第1回のWSにおいて地域の魅力と課題を知り、第2回WSにおいて対話によって、高校生を含めた多様な主体が地域課題を深掘りし、プロトタイプとしてソーシャルイノベーションの提案を行った。第3回WSにおいては、西山氏の講演を聞き「自分たちがやりたいこと」、「自分たちができること」から地域に関わりを持つアクティブラーニング的な手法により、参加者のシビックプライドは醸成されてきた、と考えられる。

まちづくりの実践には至っていないが、今回のWSで得た新たな協働の可能性を展開しつつ、持続可能な取組みとしていくことが望まれる。

謝辞：本研究は、上天草市役所の鬼塚正二氏をはじめ、地域おこし協力隊、上天草市役所や地域住民の皆様に、ご協力頂きました。記して感謝の意を表します。

参考文献

- 1) 伊藤香織・紫牟田伸子（監修），シビックプライド研究会著：「シビックプライドー都市のコミュニケーションをデザインする」，宣伝会議，2008.
- 2) 伊藤香織，紫牟田伸子（監修），シビックプライド研究会著：「シビックプライド2【国内編】一都市と市民のかかわりをデザインする」，宣伝会議，2015.
- 3) 鈴木春菜，藤井聡：地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究，土木計画学研究・論文集，Vol.25，No.2，pp.357-362，2008.
- 4) 田中尚人・堀尾和美：「小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究」，実践政策学，Vol.2，No.1，2016.
- 5) 伊藤香織：シビックプライドの源泉としての都市環境及び諸要素-富山市中心市街地と富山地域を事例として-，日本都市計画学会 都市計画論文集，Vol.54，No.3，2019.
- 6) 羽鳥剛史：地域コミュニティにおける離脱と発言に関する研究-A・O・ハーシュマンの離脱・発言理論の示唆-，日本都市計画学会 都市計画論文集，Vol.46，No.3，pp.991-996，2012.
- 7) 井形康太郎・田中尚人：地域学習における児童のシビックプライド形成に関する研究，土木学会論文集 D3（土木計画学），Vol.75，No.5，pp.181-189，2019.
- 8) 文部科学省中央教育審議会：「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議まとめ」，2016.
- 9) 文部科学省：「新しい学習指導要領の考え方」，2017.
- 10) 矢守克也：アクションリサーチ実践する人間科学，新曜社，2010.
- 11) 矢守克也：アクションリサーチ・イン・アクション共同当事者・時間・データ，新曜社，2018.

- 12) 矢守克也・李勇昕:「Xがない, YがXです」－疎外論からみた地域活性化戦略－, 実験社会心理学研究, Vol.57, No.2, pp.117-128, 2018.
- 13) 宮本匠:アクションリサーチの主体性形成について:新潟県中越地震の復興過程から, 人間福祉研究, Vol.8, No.1, 2015.
- 14) ティム・ブラウン・千葉敏生訳, 『イノベーションを導く新しい考え方デザイン思考が世界を変える』), 早川書房, 2010.4

(2021. 2.24 受付)

Practical Application of Local Problem Solving Based on Civic Pride in Kami-Amakusa City

Naoto TANAKA

In this study, it is conducted an action research on the practice of various actors, from high school students to local government officials, cooperating to solve local problems independently while cultivating civic pride by utilizing local resources rather than coveting what is not there. Specifically, workshops were conducted in the Himedo and Ryugatake districts of Kami-Amakusa City, Kumamoto Prefecture, which were depopulation, low birthrate, and aging population are severe, with the participation of local residents, city hall staff, and students from the local Kami-Amakusa High School. In the workshop, while learning about the concept of SDGs and social innovation, the participants made proposals for sustainable community development rooted in the local identity. By practicing a learning process that emphasized dialogue among diverse actors, it is able to foster attachment, civic pride, and self-confidence in the region and obtain useful learning for sustainable regional management.